

大分県産業科学技術センターニュース

Oita Industrial Research Institute

<http://www.oita-ri.go.jp/>

- 成果紹介
 - 米粉パン製造技術の確立 ----- 1
 - パソコン用ファイル関連性分析プログラムの開発 -- 3
- 事業紹介 & 事業報告 ----- 5 - 6
 - 設立記念フォーラムの開催
大分県LSIクラスター形成推進会議
 - 大分県グッドデザイン開発事業・研修会の開催
 - 2005全国少年少女発明クラブ創作展の開催
- ニュース ----- 6 - 8
 - 初の新連携計画認定事業に技術協力
 - 知能化CAMによるポケット形状加工の合理化
 - 地域新生コンソーシアム研究開発事業に採択
難燃性マグネシウム合金の高機能組織制御と
鉄道車両用部材の開発
 - 『特許流通フェア2005 in 九州』への出展
 - 『ニューアース2005』への出展
 - 明日に生きる『竹のデザインコンペ』入賞作品

成果紹介

米粉パン製造技術の確立

1. はじめに

米の消費量は年々減少しており、現在一人当たり年間約61kgとなっています。米は炊飯して米飯として利用するのが一般的ですが、食生活の多様化に伴ない粒食としての国内での消費は難しい状況にあります。そのため、米の需要拡大として米粉による用途の多様化が検討されています。その一例としてパン類、めん類などがあり、特に最近ではパンに活用する試みが盛んに行われています。県内においてもパン加工業者や米穀取扱業者等から米粉パン製造のニーズが寄せられています。パン専用加工していない米粉は副材料とのなじみが悪く、パンが膨らみにくいという問題点があります。そこで本研究では、副材料の添加と製造工程が米粉パンの体積に及ぼす影響について検討し、製造工程の管理ポイントが少ないストレート法をベースに米粉パンの製造技術を確立したので紹介します。

2. 米粉パン製造技術

1) 小麦タンパクの添加

小麦タンパクの一種で、パンの基本骨格となるグルテンとパンの体積増加により効果が期待できるグリアジンを添加し米粉パンの体積を測定しました。その結果、グルテン添加量とパンの体積の間に正の相関が認められ、グリアジンはグルテン15%以上存在下で効果を発揮することが明らかになりました(図1)。また、小麦タンパ

クの体積増加に及ぼす影響は、小麦タンパク総量(グルテン+グリアジン)が25%で最大となり、それ以上の添加では、25%添加した場合の体積と顕著な差は認められませんでした。更に、グリアジン添加効果について検討したところ、グルテン20%<グルテン15%+グリアジン5%となったことから、グルテンは最大15%までの添加でそれ以上の小麦タンパクを添加する場合は、グリアジンを併用した方が効果的であることが示唆されました。

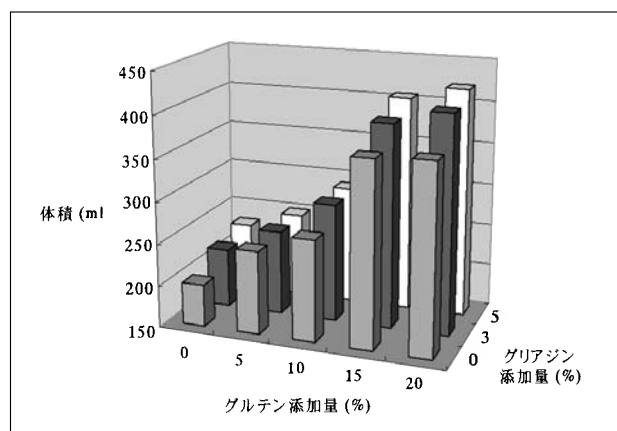


図1 36 における小麦タンパク添加量と体積の関係

2) 発酵条件

発酵温度が高いほどパン体積は大きくなる傾向にありました(図2)。発酵温度39℃以上では一定の体積増加は確認できるものの、36℃ほど顕著な増加は認められませんでした。また、米粉の生地がグルテン骨格を長時間維持できないことから、発酵時間50分以降はすべての温度で体積の減少が認められました。

よって、発酵条件として発酵時間は米粉がグルテン骨格を維持できる最長時間である40分、発酵温度は36℃が適当であると考えられました。

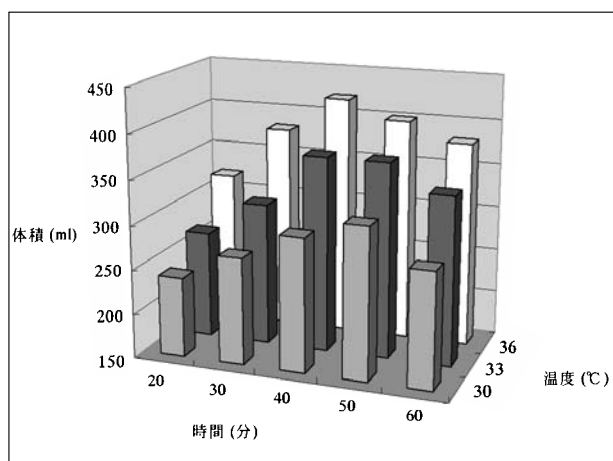


図2 発酵時間・温度と体積の関係

しかしながら、上記の条件ではパンの膨らみが十分ではないため、発酵速度の増大が期待できる糖およびイーストを増量することにより、より体積が大きくなる条件を検討しました。その結果、糖およびイースト添加量が多いほどパンの体積は大きくなり、40分間の発酵によりパン体積を十分に増加させるためには、イースト4% + 糖10%の添加が適当であることが明らかになりました(図3)。

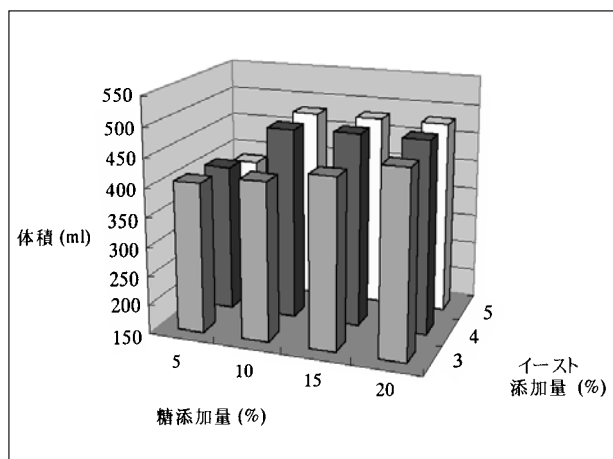


図3 糖およびイースト添加量と体積の関係

3) ミキシング条件

米粉中では粉末グルテンからグルテン骨格を形成するのに時間を要するためミキシングを長めに行い、形成後は崩壊しやすいため、ミキシング後は短時間で製造を完了するようにします。また、発酵時間が短く発酵中、生地温度上昇が見込めないことから、捏上温度を高め32℃に設定します。

これらを総合して、一般的な食パンの配合をベースに米粉パンの製造工程を確立しました(図4)。

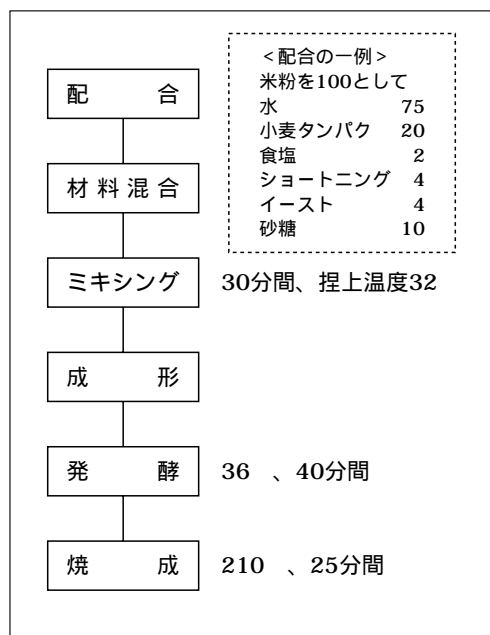


図4 ストレート法による米粉パンの製造工程

3. 九州米粉食品普及推進協議会大分支部の設立

米粉利用食品について関心のある生産者団体、食品産業事業者、消費者団体や行政・食品関係試験研究機関等を中心として九州米粉食品普及推進協議会大分支部が平成17年10月6日に設立されました。本部会では、新規商品開発に関する調査協力や相互支援などを行うとともに、情報提供等の普及推進活動を行っていく予定です。入会希望や興味・関心のある方は御気軽に問い合わせ下さい。

<問い合わせ先>

九州農政局 大分農政事務所 食糧部消費流通課
 TEL 097-532-6133
 FAX 097-532-2276

(食品産業部 佐藤裕一 sato-yuichi2@pref.oita.lg.jp)



パソコン用ファイル関連性分析プログラムの開発

1. はじめに

パソコン用の記憶装置は、急速に大容量化が進んでいます。特にハードディスクドライブは、数10ギガバイトから数100ギガバイトの巨大な容量の製品が普及しています。利用者はパソコン上でワープロ文書や表計算文書、データファイルなど多様なファイルを作成しますが、このように大容量化が進むと、一般の文書ファイルは、ほぼ無尽蔵に格納できてしまいます。そのため、

空き容量の確保のため、不要ファイルを削除することが少なくなる

把握できないほど多数のファイルが蓄積されてしまう

フォルダを用いた分類も困難になり、個人が管理できるファイル数を超えてしまう

といった状況になりがちです。必要とするファイルがなかなか見つからない場面が増えてきました。

2. 従来の技術と問題点

ファイルを探し出すために、WindowsなどのOSには、ファイル検索ツールが付属しています。これらのツールは、基本的にファイル名をカギとして検索を行います。しかし、ファイルが増えてくると、似たようなファイル名も多くなり、単純な名称のみでは、満足な検索結果が得られにくいことがあります。

そこで、あらかじめ文書の中身をインデックス化し、ハードディスク全体を網羅的に検索するというツールも登場しています。あらかじめ、格納されている文書ファイルの内容を読み取り、キーワードを抽出してインデックスを構築します。そのインデックスを用いて、キーワード検索を行うツールです。

しかし、いずれのツールもキーワードをカギにしているため、適切なキーワードを与えないと、よい検索結果が得られません。汎用的な言葉をカギにして検索すると、目的外の結果が多く表示されてしまいます。

そもそも、従来のファイル検索ツールは、ファイル同士の間接性には着目していません。利用者がファイルを探す場合、注目しているファイルに対して、

このファイルを作成した時に、参考にしたファイルを見つけない

このファイルを開いて作業していた時に、使用したファイルを見つけない

などと、思う場面はよくあります。しかし、具体的なファイル名やキーワードを思い出せなければ、検索ツールでの発見は困難です。

3. 解決のアプローチ

利用者が行うファイル検索は、2つのタイプに分類できます。キーワード型と関連型です。

キーワード型：「ファイル名や文中に、***が含まれているファイルを探したい」など

関連型：「このファイルに関連性があるファイルを探したい」など

従来、関連型の検索をサポートするツールは、ほとんどありませんでした。本技術は、OSがファイルに付与されるタイムスタンプを活用し、ファイル相互間の関連性を算出することにより、関連型の検索手段を提供します。この技術を用いることによって、利用者が注目しているファイルに対して、関連性が高いと思われるファイルを画面上に提示するシステムが可能になります。

4. 本技術の仕組み

ファイル間の関連性を手動で入力することは、現実的ではありません。そこで、OSがファイルに付与しているタイムスタンプに着目しました。一般に、OSはファイルに対して、3種類のタイムスタンプ、作成日時・アクセス日時・更新日時を自動的に付与しています。

WindowsなどのOSでは、画面上に複数のウィンドウを開いて編集することは、よくあります。短い時間間隔で操作を行ったファイル群は、同一の目的で編集されたファイル群と考えることができます。ファイルAとファイルBの利用時刻が10秒しか離れていない場合、同一目的の作業で使用した可能性が高いでしょう。この間隔が短いほど、その可能性は高いと判断できます。逆に、数10日以上も離れている場合は、関連性は低いと判断できるかもしれません。

しかし、ファイル間の関連性を判断する材料として、OSが記録している3個のタイムスタンプだけでは不十分です。そこで、本技術では、以下の工夫を行いました。

タイムスタンプを蓄積する

1つのファイルに対して、作成日時は作成した時点の1つしかありません。しかし、アクセス日時と更新日時は、それらの操作があるたびに更新されます。一般に、利用者は、作成した文書ファイル等に対して、編集やアクセスを繰り返しますが、OSには最新のタイムスタンプしか残りません。過去に行われた操作に対するタイムスタンプ情報は、失われてしまいます。そこで、アクセスや更新の操作を監視し、発生するたびにタイムスタンプをデータベースとして蓄積する処理を導入しました。

図1に、1つのファイルに対して、複数のタイムスタンプが蓄積されたイメージ例を示します。OSは3個のタイムスタンプしか保有していませんが、この例の場合、6個のタイムスタンプが記録されています。蓄積されたタイムスタンプが多いほど、分析対象となる時間距離の組み合わせが増えます。10個ずつタイムスタンプが蓄積されたファイル間の場合、分析対象となる時間距離の組み合わせは、100パターンになります。

ファイルA	作成日時:	2005/11/25 13:55:21
	アクセス日時:	2005/11/26 09:23:47
	アクセス日時:	2005/11/26 09:40:03
	更新日時:	2005/11/26 10:08:18
	アクセス日時:	2005/11/30 15:37:52
	更新日時:	2005/11/30 16:19:39

図1 複数のタイムスタンプ蓄積の例

時間距離の組み合わせイメージを図2に示します。ファイルA、B、C間に、多くの組み合わせがあることがわかります。これらの時間距離に対して統計的な処理を加えることにより、関連性の判断の精度を高めることが可能になります。

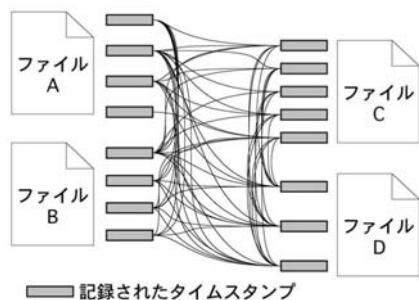


図2 時間距離の算出イメージ

具体的な時間距離の数値イメージを、図3の表に示します。3つのファイル、A、B、Cについて、単純な時間距離を算出した場合です。最後の列に、時間距離を秒単位で示しています。実際には、この数値に対して統計的な処理を行い、ファイル間の関連性を決定します。

利用者によっては、「更新作業が中心のため、更新日時を重視して関連性を判断したい」などの作業特性があるかもしれません。この作業特性を統計処理の際、重み付けとして反映できる処理も組み込んでいます。

コピー・ペースト操作も記録

ファイル作成の作業において、コピー・ペースト操作もよく行われます。他のファイルの一部や全部をコピーして、新しいファイルに貼り付ける操作です。この場合、コピー元とコピー先には、当然、高い関連性があると考えられます。このコピー・ペーストの操作情報もリアルタイムに収集し、蓄積を行います。そのデータとタイムスタンプ分析を、併用して関連性を算出する仕組みも導入しました。複

ファイル名とタイムスタンプ		ファイル名とタイムスタンプ		時間距離(秒)
ファイルA	作成 2005年12月15日 9時17分32秒	ファイルB	作成 2005年12月13日 5時00分18秒	-188,234
ファイルA	作成 2005年12月15日 9時17分32秒	ファイルB	アクセス 2005年12月15日 8時48分03秒	-1,769
ファイルA	作成 2005年12月15日 9時17分32秒	ファイルC	作成 2005年12月15日 9時22分07秒	275
ファイルA	作成 2005年12月15日 9時17分32秒	ファイルC	更新 2005年12月15日 10時28分41秒	4,269
ファイルA	更新 2005年12月16日 5時40分12秒	ファイルB	作成 2005年12月15日 9時47分56秒	-71,536
ファイルA	更新 2005年12月15日 5時40分12秒	ファイルB	アクセス 2005年12月21日 5時00分18秒	516,006

図3 時間距離の算出例

合的に算出することにより、より妥当な関連性の判断が得られると考えています。

これらプログラムによって得られた情報に基づき、利用者が注目しているファイルに対して、関連性の高いファイルを画面に表示するシステムの開発を目指しています。

図4は、本システム全体の概要図です。図5は、関連ファイルの表示例です。注目しているファイル(この図の場合、H17予算書.xls)の周囲に、そのファイルと関連性が高いと判断されたファイルが表示されています。それらのファイルを開くことにより、参考にしていたデータや、作業に用いた図表などを得ることができます。

関連性があるとされたファイルから、さらに次の関連ファイルを表示させることも容易です。このように数珠つなぎ的にファイルを表示させることにより、ファイルの検索性がさらに向上すると考えています。

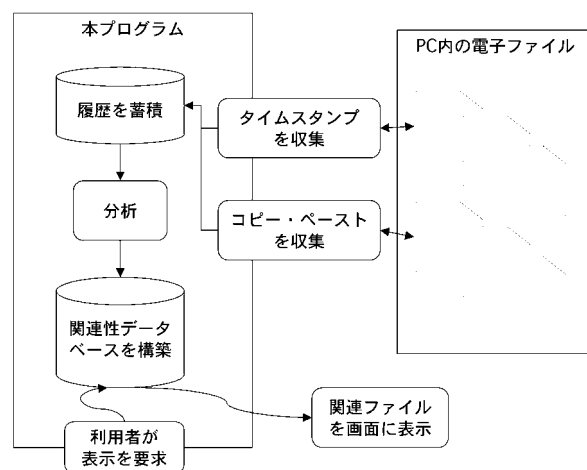
5. 今後の展開

本技術の内容は、特許出願をしています。現在、県内企業である株式会社ザイナスに対して実施許諾を行い、製品化の準備を進めています。同社はこの技術をもとにして、パソコン用ファイル管理ソフトウェアとしてネット販売する方向です。

また、ブックマーク管理やWeb閲覧履歴など、データが多く管理に手間取る分野への応用も検討しています。

Windowsは、米国マイクロソフト社の米国及びその他の国における登録商標です。

(情報産業部 幸嘉平太 ka-yuki@oita-ri.go.jp)



設立記念フォーラムの開催 大分県LSIクラスター形成推進会議

大分県LSIクラスター形成推進会議は、県内半導体産業の振興を図るため、その推進機関として本年4月に設立されました。11月1日現在、県内を中心とする59企業と11の教育機関・官公庁が会員です。8月25日には、クラスターの形成に向けた取り組みの周知と、産学官の人的ネットワークの拡大を目的に「大分県LSIクラスター形成推進会議設立記念フォーラム」を開催しました。総勢200名を超える多くの参加者で賑わいました。

フォーラムではまず、事業推進の基幹をなす「おおいたLSIクラスター構想」について、当会議の構想策定委員長である九州工業大学浅野種正教授と事務局から説明しました。本構想は、研究開発、人材育成、情報提供・販路開拓の3つの機能で構成、特に研究開発においては、課題を要素技術に分解し、学の知見を最大限に活用する産学官連携体制が特徴です。

基調講演では、東京大学大規模集積システム設計教育研究センター長浅田邦博教授から「LSIの技術動向と設計・評価技術」と題し、LSI設計技術の視点から検査・検証技術の重要性についての詳解がありました。また、当会議への期待として、人材・技術の育成と、県内外ネットワークを活用した継続的発展を挙げられました。



続く特別講演では、日本テキサス・インスツルメンツ(株)日出工場長飯坂協一氏から「激化する半導体競争を生き抜く知恵と実践力～グローバルの視点、地場の視点～」と題して、自社の事業戦略と半導体技術の動向についての解説があり、県内地場企業には高い技術力と提案型企業への発展を期待するとの提言がありました。

当会議では引き続き、半導体関連企業に有益な取り組みを推進したいと考えております。会議への入会希望や具体的に取り組みたい活動などございましたら、事務局(097-596-7179)まで連絡、ご提案をお願いします。

(生産技術部 沓掛暁史 kutukake@oita-ri.go.jp)

事業報告

大分県グッドデザイン開発事業・新商品開発研修会の開催 8/4 10/18

当センターでは、平成10年度より県内中小製造業の方々にデザインを経営資源の一環として認識していただき、商品開発の有効な工程を自社に構築していくことを目的とした事業を実施してきました。特に本年度は、新商品のプランニングや販路開拓を模索している企業の経営者やそれらを支援するデザイナーを対象とした研修会を大分県デザイン協会の協力により2回開催しました。

第1回研修会は、「商品開発のすすめ方 / 3 × 4 商品開発プログラム」をテーマとして、グッドデザイン選定審査委員でデザインコンサルタント(株)クルー代表、馬場 了(ばばさとる)氏を招へいして開催しました。

研修会には、中小製造業の方々をはじめ、デザイナーの方が熱心に聴講され、積極的な質疑応答がありました。商品開発のポイントは、買う側の立場に立った考え方を継続して持つ事であり、企業の一貫した方針が必要だとお話

れました。また、商品開発におけるデザインの重要性を指摘し、企業とデザイナーとの関わりについて説明いただきました。

第2回研修会は、東北芸術工科大学教授でプロダクトデザイナーの渡辺有一氏を招へいして開催しました。テーマを「事例に学ぶ参加型商品企画の留意点」として、商品開発の方向性や市場での位置づけを絞り込んでいくマーケットマップという手法を講演していただきました。

また、両講師には研修会終了後、実際に商品開発を行っている研究会への指導を行っていただき、各研究会のテーマにそったアイデアの出し方と収束方法により実践的な指導を受ける事ができました。

当センターでは、商品の開発工程や販路開拓に関する支援事業を行っておりますので、お問い合わせ下さい。

(情報産業部 吉岡誠司 yosioka@oita-ri.go.jp)



2005全国少年少女発明クラブ創作展の開催

当センター内にあります社団法人発明協会大分県支部は、皆様方のご支援によりまして、今年で設立70周年を迎えることができました。そこで、設立70周年記念特別事業として、発明協会総裁である常陸宮殿下と妃殿下をお迎えして、日田市で2005全国少年少女発明クラブ創作展及び平成17年度九州地方発明表彰式を開催しました。

日田市での行事に先立ち、11月6日に当センターで県内少年少女発明クラブの交流活動が行われ、常陸宮ご夫妻がご視察されました。子どもたちはグループに分かれて5種類の工作を行い、ご夫妻は各グループをゆっくり見て回られて子どもたちに声をかけておられました。

7日には、日田市のマリエールオークパインにおいて、平成17年度九州地方発明表彰式を開催し、優れた発明に功績のあった九州各県の技術者の方々を表彰しました。

また、8日は日田玖珠地域産業振興センターで、九州で初の開催となる2005全国少年少女発明クラブ創作展の開催式が行われました。常陸宮ご夫妻は、入口でテーブルカッ

トをされた後、全国の少年少女発明クラブが創意工夫して製作した97の作品をじっくりご覧になりました。

開場式には、地元日田市咸宜小学校5年生約100人が参列し、創作展を見学しました。子どもたちにはとても良い経験となったことと思います。

(技術支援部 松本昌浩 matsumoto@oita-ri.go.jp)



平成17年度九州地方発明表彰式



少年少女発明クラブ交流活動のご視察



2005全国少年少女発明クラブ創作展見学風景

ニュース

初の新連携計画認定事業に技術協力

本年4月に施行された「中小企業新事業活動促進法」に基づき、九州経済産業局が認定する「異分野連携新事業分野開拓計画(略称:新連携計画)」に、7月15日、日田市の(株)トライウッドをコア企業とする産学官連携体の事業テーマ「未利用木質系資源の粒子化による新規建材の開発・販売」が、認定されました。

この新連携計画は、地域の中小企業等がそれぞれの「強み」を持ち寄って新事業への取り組みを加速させる連携体の事業計画を(独)中小企業基盤整備機構九州支部の支援等も得ながら加速させるものです。

大分県下の連携企業体としては、初の計画認定となった

この事業は、コア企業以外に(有)紅屋、(株)エクセム、日田木材(協)、(協)日田家具工業会、九州大学、日田市森林組合とともに、当センター日田産業工芸試験所も参画して取り組むもので、従来の木質素材では提供されていない多様なデザインと機能をもつ「木質系新規建材製品」(面塗材・木質プラスチック等)の製造と販売が目標です。現在、当センターも積極的な技術協力を行いながら、「新連携対策事業(事業化・市場化支援事業補助金)」などを活用し、機械等の改良・開発・試作機の製作及び各種試験及び成型技術の開発を行なっています。

(日田産業工芸試験所 小谷公人 kotani@oita-ri.go.jp)

知能化CAMによるポケット形状加工の合理化

エステーケーテクノロジー(株)大分市が、九州経済産業局より平成17年度中小企業技術革新成果事業化促進事業の補助金の交付を受け、大分県産業科学技術センターと共同で新しい切削加工法について共同研究を行います。

機械加工では、被削材にポケット形状(凹部)の加工をほどこす場合が多くあります。しかし近年では加工物に難削材が増加し、形状も深穴など加工の難しいものが増えていきます。これにエンドミル工具による切削加工法を用いると、工具折損や工具寿命の短縮が起るため、多くの場合は加

工時間の長い放電加工に頼るほかに合理化の隘路となっていました。

当センターでは、これまでエンドミル工具の切削抵抗について研究を進め、新型の工具バスにより工具折損を防ぎ工具寿命を延ばすことに成功しています。

今回はこれを発展させ、任意のポケット形状・小径コーナ部の加工・深穴加工への対応が可能となるような高効率切削加工法(知能化CAM)を開発することが目的です。

(生産技術部 大塚裕俊 ootuka@oita-ri.go.jp)

地域新生コンソーシアム研究開発事業に採択 難燃性マグネシウム合金の高機能組織制御と鉄道車両用部材の開発

CO₂排出量削減策の一つとして、省エネルギー化を目的とした自動車や鉄道車両等の軽量化が求められています。現在、鉄道車両は比重の軽いアルミニウム合金が多用されています。より軽い比重のマグネシウム合金は、燃えやすいという性質から採用は見送られていました。

そこで、(独)産業技術総合研究所が開発し、(社)日本鉄道車両機械技術協会が不燃材として認定した難燃性マグネ

シウム合金の総合的な生産技術を確立することによって、鉄道車両材料への展開を目指した研究プロジェクトを、九州大学を中心とする県内外9機関からなる研究グループが、経済産業省平成17年度公募事業へ提案し、採択されました。

当センターは、木本機器工業(株)大分市と共に鋳造部材の低コスト製造技術の確立に取り組みます。

(生産技術部 園田正樹 m-sonoda@oita-ri.go.jp)

『特許流通フェア2005 in 九州』への出展



去る10月26日(水)~28日(金)に北九州市の西日本総合展示場新館で開催された特許庁・九州経済産業局主催の「特許流通フェア2005 in 九州」に、当センターが所有する竹材表皮の改質処理技術(特許)、竹粒等の製造技術(特許出願中)、木製幼稚園家具(意匠)の未利用産業財産権3件を出展しました。

この3件について簡単に説明しますと、竹材表皮の改質処理技術は、接着剤や塗料が附着しにくい竹表皮のワックス分を紫外線照射によって除去することによって附着性を改善するものです。また、竹粒等の製造技術は、天然系プラスチック材料等に利用できる角張った硬い竹粒を効率よく製造する技術です。そして木製幼稚園家具は、子供が使いやすいデザインに仕上げた幼稚園や保育所等で使用する木製イスです。

会場では説明パネルと成果品を展示し、開発担当者が来場者への説明と意見交換を行いました。

なお、これら以外にも当センターで研究開発した成果や産業財産権が数多くあり、ホームページでも公開して技術移転や事業化を図っていますので、関心のある方は、ご遠慮なくお問い合わせください。

(企画管理部 谷口秀樹 taniguchi@oita-ri.go.jp)

『ニューアース2005』への出展

2005年10月26日(水)~10月29日(土)の4日間、インテックス大阪にて、標記展示会が開催されました。本展示会は『国際環境総合フェア』と位置付けており、15の国と地域から256の企業、団体、自治体が出展しました。大分県からは、県内企業、大学等との共同研究で開発した、竹製接合具、スギ樹皮製油吸着材、面塗り材・木粒子ブロックを出展しました。来場者との意見交換を通じて、開発品に対する関心の高さを確認することができました。

(日田産業工芸試験所 古曳博也 kohiki@oita-ri.go.jp)



明日に生きる『竹のデザインコンペ』入賞作品



グランプリ「ペンダントライト」 廣瀬慶子作(大分市) 準グランプリ「たまごばこ」 森脇けい子作(別府市)

去る11月17日(木)～18日(金)に別府コンベンションビューローにおいて第46回全国竹の大会が開かれました。年に一度の大会で、大分県での開催は17年ぶりです。北は北海道から南は鹿児島県までの全国の竹の関係者が一堂に集まりました。各種分野の功労者を表彰する式典などの他、記念講演会や「竹材・竹製品部会」「たけのご部会」「竹炭・竹粉部会」の3つに分



奨励賞 大型フロアスタンド
川端辰雄作(滋賀県)



奨励賞 竹林の橋(デザイン計画の部)
太刀川英輔作(東京都)

かれパネラーと共に研究する分科会、また、ヤングフォーラムと称する若手後継者による自由な意見交換会など多彩な行事が行われました。

その中で今年の春から私たちが事務局として公募などの準備をしてきた「竹のデザインコンペ2005」の入賞作品も展示され、多くの来場者の注目を集めました。このコンペティションは毎年、盛大に開かれる大会を関係者だけのイベントでなく、竹に関心を持つ人たちにも門戸を開いていこう、そして、竹の活用を自由な発想で提案してもらって明日の商品化につなげようと5年前から開いているものです。募集内容は「製品の部」と「デザイン計画の部」



奨励賞 キリムバッグ 君山和高作(別府市)

に分かれており、今年の応募は2部門あわせて62の作品が集まりました。

グランプリと準グランプリ、そして、奨励賞3点を選ぶ審査会は、大分県立芸術文化短期大学の澤田佳孝教授や建築家の塩塚隆生氏など6名の専門家で審査を行いました。グランプリに選ばれたのは、大分市の廣瀬慶子さんの「ペンダントライト」で、審査委員長の

講評では、「照明器具のデザインのポイントは、いかに美しい光を創り出す装置たり得るかという点にある。この作品は、竹の持つ特性を編組というかたちで生かし、木漏れ日のような柔らかく変化のある光を創り出している。」との高い評価でした。

準グランプリは別府市の森脇けい子さんの「たまごばこ」が選ばれ、「編組の技と形がうまく調和している。」と評価を受けました。共に県内の若い竹編組技術者が受賞し、別府竹工芸の技術レベルの高さを示すうれしい結果となりました。

入賞作品が明日に生きることを期待しています。

(竹工芸センター 豊田修身 toyoda@oita-ri.go.jp)